

ユニテ

UNITÉ

5



目 次

ロマン・ロランの言葉	1
ロマン・ロランとゲーテ	南大路 振 一 ... 2
ロマン・ロランに関する国際シンポジウムに参加して	宮 本 正 清 ... 25
R.R.のための覚え書きNo.1	椿 充 代 ... 29
ユニテの広場	山口 三夫・名倉 美津子・岡田 淳平 ... 37
ロマン・ロラン研究所から	41
友の会だより	43
あとがき	46



日本・ロマン・ロランの友の会編

ロマン・ロランの言葉

「^{まじめ}真摯な芸術家ロランの告白」

私は2,3年このかた、ロマン・ロランの書簡集に魅せられて、教職の合い間をほとんどささげてきました。それは1967年にアルバン・ミシェル書房から出版された「どちらから見ても美しい顔(Un Beau Visage à Tous Sens)です。1944年にロランが逝いて以来、マリー・ロラン夫人の熱誠の果実として、逐次刊行されつつあるロランの書簡集の第17巻、ロランと親交のあった旧友、知人はもちろん、文豪トルストイ、イブセンから、アインシュタイン、アルベルト・シュワイツァーのような科学者で人類愛の偉大な功労者、全世界の平和と人類の幸福を念ずる聖者ガンディにまで愛の象徴として敬仰され、平和のためについに生涯を捧げるに到った人々に宛てた208通の手紙は、恐らく、史上空前の言葉でロラン精神の結晶であります。それはロマン・ロランの血涙であります。

「あなたは単純な人々、生きて行くこと以外に人生の目的をもたないで、生きることに満足している人々を軽く見すぎていると思われます」と、文学的成功を夢みているらしい若者にロランは、友情に充ちた、しかも酷しい批判を下しています。「密集した群集については、語らないことにしましょう」とあなたは言われるのですね。——ところが私は彼らについて語ります。そして他の人々と同じように彼らを愛します。彼らはあなたが言われるように、決して野獣のように幸福ではありません。野獣のように、動物のように、そしてわれわれのように、時には幸福であり、時には不幸であります。私は、自分がありのままの彼らの兄弟であることを感じます。

「嘘を言わねばならないなら、われわれは嘘をつくらう…」というあなたの言葉に私は同意できません。けっして嘘についてはなりません。…昔のように牧師であり、哲学者兼詩人であって、「人々をだます」者は私の個人的な敵です。けっし

て人々をだましてはなりません。現実がどんなものであっても、その現実を見て、それを耐え忍ぶ勇気を彼らに与えるべきです。哲学者は何よりも先づ真実な人間、人間の中でも、最も真実な人間でなければなりません。彼と普通一般の人間との差違は、この真理の雄々しさと、真理を知る天才であるか否かにあります。たいていの詩人たちに対して、どうともしがたい嫌悪の情をいただくのは、彼ら詩人が、つとめて自分自身を欺し、快い夢によって他の人々を欺そうとすることです。病める詩人と、美しい嘘を言う詩人を対立させる必要はありません。どちらも病人です。— 現実の世界の暗さと、輝かしい力をま正面から見ることを辞さない人々以外には、真に健康で雄々しい人はありません。」

上に引用したロランの言葉は、ジャン・クリストフ、オリヴィエ、グラチアたちがわれわれ読者を魅するのをもっともだと感じさせます。ただ、しかし、ロマン・ロランは一人物の性格、その特質、その天分などを単純に、民族性に帰するものではありません。それは不十分で、芸術作品が含む真理、作家の芸術的天分などについて、簡単な形式的な分析では、真実に触れる事は容易ではありません。その事を、ロランは異国の女性の友に教えたかったのです。 — 宮本正清 —

ロマン・ロランとゲーテ

南大路 振 —

I

「ロマン・ロランとゲーテ」という大きなテーマをかかげましたが、私はロランの一読者にすぎません。またゲーテの専門家でもありません。本日、私がいたしますのは、ロランの評論集『道づれたち』（みすず書房版の全集第19巻に所収）の

中の一章「ゲーテ」を — 若干の解説を加えながら — 紹介することにとどまらず。

しかしそれに先立ちまして、まず一般論として、「ロランとゲーテ」というテーマに、どういう扱いがあるかを少しばかり考えてみたいと思います。(それは本日の私の話にも関係があることであります。) それには少なくとも三つの扱いがあると言えましょう。

1) 「ロランにとってゲーテが何であったか — ロランがゲーテをどう読んだか — ロランがゲーテから何を学んだか」といった扱い方、つまり一言でいえば「ロランにおけるゲーテ」というテーマになり、これには種々の資料があるであります。その二、三を挙げますと、まず、若いロランがローマに留学しました1890年頃(ロランは24才位で、ゲーテの死後、半世紀以上たっていますが)そこで親しくつき合ったドイツの老婦人マルヴィーダ・フォン・マイゼンブークからゲーテ理解の手引きを受けています。マルヴィーダは — ご承知の方も多と思いますが — ロランの精神的母親の役割を演じた人物でありまして、彼女は「ゲーテ — とくに古典期の円熟したゲーテを尊敬するが、愛情はもてない」とする若いロランにたいしまして、ゲーテの正しい理解の道を示そうと努力します。当時のロランとマルヴィーダの往復書簡のなかに興味ぶかい問答がいくつも見られます。 — 次に、ロランには『ゲーテとベートーヴェン』と題する著作があります。これは1927年、つまりベートーヴェンの死後百年を機会に書かれたものでありますが、これについては、後ほど触れたいと思います。 — そして、本日私が取りあげます『ゲーテ』があります。これは1932年、ゲーテの死後百年を記念したものでありますから、ロランも66才になっており、ここには円熟したロランによるゲーテ論が期待されます。考えてみますと、あれほどドイツ文化に関心の深かったロランのことですから、そのドイツ文化をいわば代表するゲーテと、ロランとの間に緊密な精神的つながりがあったとしても、少しも不思議ではありません。要するに、「ロランとゲーテ」という一見、漠然としたテーマを、まず「ロランにおけるゲーテ」という視点から扱うことは十分に可能といえましょう。

2) 「ロランとゲーテ」というテーマの第二の扱い方として、「ロランとゲーテ

を結びつけるものは何か？」というのがあると思われます。つまり、今日われわれから見て、この両者が何か共通の「精神の糧」といったものをもっているか、という問題であります。どちらも全ヨーロッパ的なスケールの人物でありますから、たとえ一方はフランス人、他方はドイツ人であり、また、時代が約一世紀へだたっておりましても、これら二人のうちにヨーロッパの伝統的な文化の多くの要素がいわば共有財産として生きていることは容易に想像されます。そういう要素は多くの場合、空気や水のように無意識のうちに吸収されると思われますが、とくにロランとゲーテの場合、それぞれ自分たちが精神的に成長するうえで、きわめて重要な働きを受けた、とはっきり意識しており、しかもロランとゲーテに共通するものが少なくとも三つあります。それは第一に詩人シェイクスピアであり、第二に哲学者のスピノザであり、第三にイタリアの風土と芸術（別の見方をすれば、ルネサンスを越えてローマにまでさかのぼるイタリアの歴史）——これら三つであります。まずロランにおけるシェイクスピアの意義については、評論集『道づれたち』に収められたシェイクスピアにかんする「四つの試論」を参照することができます。そこには、少年時代から——フランス人として——あれほど親しんだコルネイユの古典劇を離れて、次第にシェイクスピアに近づいて行った過程が回想されています。そこではシェイクスピアの世界は一つの「自然」として捉えられています——「ありとあらゆる存在、喜びも悲しみも抱擁している世界、それらの一方が他方を補うような世界」であります。そしてこのような世界を創造するシェイクスピアは、みずから「幾千の人生を生きる」人間として理解されています。ロランの言葉であります、「彼〔シェイクスピア〕は、気が向けば、過去を現在にすることもできる。また現在あるものを、すでに遠い過ぎ去ったものとして見ることもできる」とあります。そして興味ぶかいことに、この個所にロラン自身の注がありまして、「ゲーテも同様」と録されております。つまりロランの眼には、ゲーテはシェイクスピアと同質の人物として映じていたわけであります。それはともかく、ここに——ごく簡単に——触れましたシェイクスピア像は、ほとんどそのままゲーテにも見出されます。その長い生涯にわたる幾つもの資料のうち、ただ一つだけ挙げますと、1771年、シュトラースブルク遊学時代の22才のゲーテによる熱烈なシェイクスピア頌があ

ります。短い断片ではありますが、ここには初めてシェイクスピアを知った時の強烈な印象が次のように述べられています、「私がシェイクスピアを読んだ最初の一ページが、すでに私を生涯彼のものにしてしまった。そして私が最初的一篇を読み終えた時、私はまるで、魔法の手によって一瞬のうちに視力を与えられた生れながらの盲人のように立っていた。」つまり若いゲーテには、一つの新しい世界が開けたわけであります。それは一つの啓示でありました。彼はシェイクスピアによって自分の存在が無限に広がるのを感じます。これはあの「規則正しく出来ている」——つまり三一一致の規則がきびしく守られたフランス古典劇からは得られなかった体験でありました。シェイクスピアはこの点でギリシアのホメロス、ソフォクレス等と並ぶ詩人となります。シェイクスピアがわれわれを案内してゆく世界は一つの全き世界であり、そこでは、われわれが善とよび、悪とよぶものが有機的に、一つの楯の両面をなしています。また、多種多様な人物を自由自在に創造するシェイクスピアは、あのギリシア神話のプロメテウスにたとえられます。そしてこれらの人物は、まったくの「自然」であるとされます。「自然！ 自然！ シェイクスピアのつくる人間ほど自然なものはない。」——歴史的には、この青年ゲーテによるシェイクスピア頌は、18世紀のドイツが、それまで支配的であったフランス古典劇から次第に離れて、イギリスのシェイクスピアへ近づく過程での一里塚ではありますが、そういった歴史的背景は別にしまして、ここに示されたシェイクスピア像は、さきのロランによるシェイクスピア像と多くの本質的な点で一致しています。（なお、劇作家としてのゲーテとロランがそれぞれシェイクスピアからどのような技法を学んだか、彼らの劇作品のなかにどのようなシェイクスピア的要素がみられるか、といった問題もそれとして興味ぶかいものがあります。）

さて、ロランとゲーテを結ぶ第二のものとしての、17世紀の哲学者スピノザであります。これはロランにあつては『内面の旅路』の中の一章「三つの閃光」に、16才から18才の若いロランとスピノザのめぐり合いが回想されています。一方、ゲーテについてみますと、彼は——ちょうどシェイクスピア体験と同じように——その長い生涯にわたってスピノザと取り組んでいます。私にはスピノザの哲学をくわしく解説することは不可能であります。が、「神」の考え方、「自然」の考え方、

「神と自然の関係」についての考え方（たとえば、「神を自然のなかに観、また自然のなかに神を観る」——いわゆる汎神論、パンセイズム——で、ロランとゲーテがそれぞれスピノザから多くのものを得たことだけは一つの事実として指摘できます。ことにゲーテの場合、彼は自然科学者でもありましたために、彼の「自然」の考え方にスピノザがどのように影響したか、という重要な問題があります。これに関連して晩年のゲーテは、自分にとって最も重要な役割を演じた人物として再三スピノザの名前を挙げております。しかも興味ぶかいことに、その場合、いつもシェイクスピアの名前が同時に出て来ます。つまりスピノザとシェイクスピアはゲーテの長い生涯にわたっての「道づれ」であった訳です。一方、ロランの場合、シェイクスピアはともかくとして、スピノザが生涯の「道づれ」であったと言えるかどうか、私にはわかりませんが、ともかく「ロランとゲーテを結ぶもの」としてシェイクスピアとスピノザを考え、この視点からロランとゲーテを比較することは可能だと言えるでしょう。

3) さて、ロランとゲーテを結ぶ第三のものとして、両者のイタリア体験があるわけですが、まずロランの場合、青年時代のローマ留学が、人間として、作家としての将来にどれほどの意味をもったかは、今さら言うまでもないと思います。『ジャン・クリストフ』の着想が永遠の都ローマでえられたことは、よく知られています。当時のロランの生涯を伝える資料として回想録『ローマの春』のほかに、母親宛てのおびたしい手紙があります。一方、ゲーテのイタリア体験は、1786年から88年のことで、ロランより百年ちかく前になり、ゲーテはすでに37才から39才、その身分もワイマル公国の大臣でありました。しかしこのイタリア体験が芸術家として、また人間としてのゲーテに決定的な意味をもった点では、ロランの場合と同じであります。但しゲーテの場合には、そのイタリア体験は彼一個人の問題にとどまることなく、やがてドイツ古典主義、或はワイマル古典主義の成立という歴史的な出来事として実を結びます。またゲーテの場合には、イタリア旅行が自然科学者（とくに生物学者）としての彼に重要な意味をもったことも忘れてはなりません。こういった相違をも念頭においた上で、「ロランとゲーテのイタリア体験」というテーマを追究しますと、いろいろ興味ぶかい事実が明らかになるのではないが、

という予感がいたします。

最後に、「ロランとゲーテ」という大きなテーマを扱う第三の仕方として、これら二人が現在のわれわれにどのような意義をもつか、というのがあると思います。これも大変漠然とした問題提起のようで、おそらくその答えも人によって様々でしょうが、われわれ人間存在の基本的なすがたを、(或る根源的なものの)絶えざる「発展」として把える態度——ゲーテの場合、これが動物や植物についての「変態」(メタモルフォーゼ)の根本思想になり、一方、ロランの場合、「生」はしばしば「大河」によって象徴されますが——このような動的、ダイナミックなもの見方はゲーテとロランに共通しており、われわれのもの考え方にも貴重な示唆を与えてくれます。そしてこういった問題につきましても、本日これから取り上げますロランによるゲーテ論から多くのことを学べるのではないかと思います。

さてこのゲーテ論は——先程も申しましたように、1932年、ゲーテの死後百年を記念して雑誌「ヨーロッパ」に寄稿されました。ロランは66才であります。全体で25ページほどのもので、序と四つの章からなっています。ロラン一流の詩的な、暗示的な文体で書かれ、必ずしもわかりやすいとは申せません。しかし、少し注意ぶかく読みますと、各章が一つの主要テーマをもち、しかも全体として有機的な構成をなしていることに気づきます。

II

まず序でロランは、「ゲーテのような人物を一定の枠にはめ込んで、ゲーテはこれこれ、しかじかの人間であった、というように規定することはおよそ不可能である」、したがってわれわれはゲーテについて、まるで正反対の論を立てることができる、と強調します。つまりゲーテのような人物は本質的に「無際限」「無限定」である、というのであります。ロランはこのことを「大河」(fleuve)の比喩を用いて説明します。いかにもロランにふさわしいことであります。ロランは、ゲーテと親交のあった或る人物のことばを引用して、「どの党派もゲーテを自分の味方だと思っていたが、ゲーテはどの党派にもついていなかった。彼はあらゆる方向をと

った。そして非常に多様な、かく然とするような姿に変形するのだった…」と述べています。そしてゲーテ自身、自分の本性がこのように無際限であり、無限定であることをよく意識していました。これについてロランは、1813年（ゲーテが64歳の時）、友人で哲学者のフリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービに宛てた手紙を引用します。「私の本性の多様な傾向をもってしては、私は一つの考え方で満足することはできない。【中略】 天地の事物はひじょうに広大な世界をなしているのです、それを把握・抱擁することは、すべての存在のすべての器官が集まって始めて可能であろう。」実はこの手紙は晩年のゲーテのスピノザ研究に関係したものであります。ヤコービはみずから哲学者としてスピノザをふかく研究し、若いゲーテを手引きした人物でありましたが、ゲーテは1813年頃のスピノザ研究では、ヤコービと意見を異にします。それは、ヤコービがスピノザを結局は無神論者とみた——実はこれが18世紀の後半にいたるまで世間一般のスピノザ像であったのですが、ゲーテはこれに賛成できなかった訳です。いま問題の手紙はこの両者の論争に関するものですが、上述のとおり、ロランによる引用には【中略】があります。本来そこには次のような注目すべきゲーテのことばがみられます、「詩人・芸術家としては私は多神教徒（Polytheist）であり、これに反し、自然研究者としては汎神論者（Pantheist [つまりスピノザ主義者]）である。そしてそのいずれについても決定的である。ところが、私が倫理的人間として、私の人格のために、ただ一つの神を必要とする場合には、それはそれでうまく行くようになっている」——つまり、伝統的なキリスト教の世界に困難なく入れる、というわけです。こういう文言がロランによる引用の【中略】の部分にあって、そして上述の、「天地の事物はひじょうに広大な世界をなしているので云々」と続きます。全体としていかにもゲーテらしい言葉だと思えます。

ところでこの一節を注意ぶかく読むと面白いことに気づきます。と言いますのは、ゲーテは「私の本性の多様な傾向をもってしては云々」というふうに自分の本性について語っているうちに、いつのまにか、天地の事物が構成する広大な世界」のことに移っています。つまり、これら二つは同一視されているわけです。言いかえれば、ゲーテ自身、自分をそのまま一つの「自然」として意識していたことになり

ます。われわれは「自然」にたいして、何か一つの特定の目的・目標を外部から押しつけることはできません。このように考えますと、ロランが同じ個所で引用する、1830年（ゲーテが死ぬ二年前、彼はすでに81才ですが）の手紙の意味がよくわかります。——「自然や芸術は目的をもつにはあまりに大きい。またその必要もない。なぜなら一切が結ばれており、そしてこの連鎖、それが生（命）なのだから。」（ゲーテの原文はやや異なって、「いたるところに関連があり、そして関連が生（命）なのだから」とあります。

ロランはゲーテをこのような一つの大きな自然として捉えようとします。つまり、ゲーテ即ち大自然を測ることはできない、それを試みることは無益である、しかし「彼ゲーテ即ち大自然に自分が何を負っているか、また自分が彼ら——ゲーテと大自然——から何を飲んだか【ここでも「大河」の比喩が生きています】を語ることはできる」——これがロランによるゲーテ論の序のむすびの言葉であります。

Ⅲ

第1章へ入りますと、まずもう一度、ゲーテと自然との類似性、同一性（*identité*）のことが述べられ、ゲーテのことは——「私が自然について語ったのではない、真実も誤りも、すべては自然が（私のなかで）語ったのだ云々」が引用されます。ところでこれの出典は、『自然』と題する一つの断片ですが、このロランのゲーテ論に何回か出て来ますので、ひと言これについてお話しておきます。

これは1782年か83年、ゲーテが33か34才の時に書いたと言われる熱烈な自然賛歌で、一種の散文詩であります。ここにいう「自然」は——われわれ人間もそれに包まれ、そしてその一部をなしているのですが——とくに、時々刻々、新しい事物を産む自然です。このゲーテ論のさいごの第4章に、「自然は永久に、新しい形態を創る。現在あるものは未だかつてなかった。かつてあったものは再びもどらない云々」という一句が引用されていますが、これもこの断片から採られたものです。

ところで「産む自然」という観念、概念ですが、これはヨーロッパの伝統的な、

自然の分類法によっています。簡単にいいますと、自然は「産み出す自然」と「産み出された自然」の二つに大別されます。つまり自然をその創造行為の面からみる場合と、その創造行為の結果・所産の面からみる場合の区別で、前者は「能動的自然」（ラテン語で *natura naturans*）、後者は「所産的自然」（ラテン語で *natura naturata*）と呼ばれます。前者、「能動的自然」という語はこのゲーテ論の第1章の結びに出てきます。それは戯曲『ファウスト』第Ⅱ部、第1幕の終りで主人公ファウストがギリシアの美女ヘレナを探し求めて、いわゆる「母たち」のところへ赴く個所にふれたもので、ロランはこの神秘的な「母たち」を能動的自然、*natura naturans* とみなしています。つまり「母たち」の胎内には、あらゆる存在の形態（原型）が漂っています。「母たち」はその胎内から不断に事物を産み出します。いま問題の『自然』と題する断片は、このような産む、能動的な自然を熱烈に賛美したものであります。

ところで、このような自然の分類は、しばしば偉大な芸術家とその作品にも適用されます。いまわれわれがシェイクスピアを一つの「自然」にたとえた場合（このことをロランもゲーテもやったわけですが）、「その作品全体、或はその中の人物がまったく一つの自然のようだ」という意味なら、その場合の自然は「産み出された、所産的な自然」に相当するでしょう。しかし一方で、シェイクスピアのすばらしい創造の営みそのものが、まさに自然の生産行為を思わせる、とわれわれが言った場合の自然は、「能動的自然」に相当します。先程いいましたように、偉大な芸術家とその作品はしばしば「自然」にたとえられますが、それは以上のような二重の意味においてであります。ヨーロッパ文学では、その例はまずホメロスにみられますが、シェイクスピアもその一例であり、さらにロランにとっては問題のゲーテも亦そうであります。

ここでもう一度、問題の断片『自然』に帰ります。先程私は、これは「1782年か83年、ゲーテが33才か34才の時に書いたと言われる」と申しましたが、実は、この断片はゲーテ自身の手になるものではなく、当時の或る友人が書いたものだ、という説があります。ロランは触れていないことではありますが、事情は次のようであります。つまり、ずっと後年（半世紀ちかくたって）、1828年——ゲーテはも

う80才になろうとしています——彼はこの断片を人から見せられたところ、「自分が書いたかどうか記憶がさだかでない」、「しかし、内容はあの当時、つまり1780年代の自分の自然観〔それは一種の汎神論、スピノザ主義への傾向をもつものですが〕とよく一致している」という意味の告白をしました。それは1828年の或る手紙で述べていることですが、ゲーテはさらにこの手紙の中で、この『自然』と題する断片について重要な注釈を加えています。そしてその部分をロランは——ゲーテ論の第3章においてですが——引用しています。すなわちゲーテは、「1780年代の『自然』と題する断片で述べられた自然観には、まだ欠けているものがある」とします。つまりそれ以後ゲーテの自然観はさらに充実したわけです。そして「欠けているもの」というのが——彼自身のことばで言えば——「自然の二つの偉大な動輪(Triebrad)」、ロランの引用するフランス訳では、「動輪」ではなく「発条」(ressort)となっていますが、意味するところは共に原動力であります。別のことばで言えば、「自然の営みの根本原理」にもなりましょう。これに二つあり、これらをゲーテは青年時代の1780年以後に認識したというわけで、それは第一に「分極性」(双極性、ロランもドイツ語の原語をあげていますがPolarität)、そして第二に「上昇」(高昇、やはり原語でSteigerung、ロランにあってはprogression、つまり「進行」「前進」となっています。ややニュアンスがちがうように思います。)この二つの基本概念はゲーテを理解する上に、きわめて重要であり、ロランもこれに注目するわけです。「分極性」、Polarität——これはゲーテにあっては、「絶えざる引力と斥力」として把握されていますが、卑近な例でいえば、磁石の北極(N)と南極(S)、電気のプラスとマイナス、潮の満干、動物の呼吸作用、心臓の収縮と拡張などが考えられます。(またやや次元はちがいますが、男性と女性、光と闇なども加えることが出来るでしょう。)これらはすべて、一つの実質の二つの面、二つの現われ方であって、相互に不可分の関係にあります。もう一つの「上昇」または「進行」、Steigerungは、低い存在から高い存在に向かっての絶えざる運動を意味します。しかも単純な、一直線をなす上昇ではなく、一見同じような現象をくり返しながら、しかも上昇してゆく——つまり比喩的にいえばラセン形をなしての上昇であります。ロランもとくにこのことに注意を促しています。)ともかく晩年のゲーテ

にあつては、この二つ — 「分極性」と「上昇」 — が自然活動の二大原理として考えられているわけです。

ところで人間もまた自然の一部でありますから、人間の精神的・肉体的いとなみにもこの原理はあてはまると考えられます。その限りにおいて人間は「大宇宙」(マクロコスモス)の中の「小宇宙」(ミクロコスモス)であります。これを説明するためロランは晩年のゲーテの箴言、「自然の核心は人間の心のなかにあるのではないか?」を引用しています。

ところでロランは、さらに進んで、ゲーテの作品(詩、小説、劇)をも、このような動的な原理に支配された一つの自然、つまり「小宇宙」とみなしています。たとえば「彼の詩のなかで...大地の息吹きと、もろもろの元素の力(エネルギー)とを私たちは呼吸する」、また、「ただ一日の愛や過失の、苦悩と悔恨のために世界全体が、宇宙(コスモス)が打ちふるえる」といった印象ぶかい言葉がそれであります。

要するに、ゲーテの作品はこういった意味でも「自然」なのであります。したがって、そのような作品には、日常的な意味での、また狭い、たんに審美的な意味での調和・均斉とか、或は完成とかを欠く場合があります。ロランはこれについて、ゲーテの戯曲『タツゾー』、『ファウスト』、また小説の『ヴィルヘルム・マイスター』などを列挙しまして、「ほとんどどの作品も、悲壯な、調和への意志によって支えられているが、ほとんど常に、解決をみないで、砕けて、過渡的な美しい、残忍な不協和音にとどまっている」と言っていますが、これは一つのすぐれた批評だと思います。たしかにゲーテの作品を、通常の意味での「技巧」、「技法」の完成度という尺度で測ると、必ずしも高い評点を与えられない場合が少なくありません。劇作についていえば、この点、親友のシラーのほうがだいぶ上ではないかと思えます。しかしゲーテの作品の魅力は、たんなる技巧を超越して、「生」そのもの、「自然」そのものを現わしているところにあります。「彼の芸術の内部には、始源的・根源的な力(la Force élémentaire)がひそんでいる」とロランは述べていますが、この「力」がわれわれを魅惑するのだと思います。そして私は、以上のことはロラン自身の多くの作品にもあてはまるのではないかと、思います。

ところで、このような「自然」或は「生」の始源的・根源的な働きを捉えるのには、まず自然のありのままの姿を正確に——自分の主観を捨てて——観察し、考察することから始めなければなりません。それが徹底したリアリストとしてのゲーテの仕事であります。最晩年(1827年)のゲーテが秘書のエッカーマンに述べた言葉をロランは引用します。(ロランのフランス文は原文とはややズレていますが)「私は詩的な目的——つまり作詩の目的——のために自然を観照したことは決してない。しかし私が初めにやっていた自然(風景)のスケッチと、それにつづく私の自然研究とは、自然のあらゆる事物を絶えず、正確に観察するように私を促した。こうして私は徐々に自然を暗記した——その細部の細部にいたるまで。そこで私が詩人として一筆必要な場合には、自然が私の命ずるがままに来るようになった。それで私が直理(真実)にたいして罪を犯すことは容易にない。」

ところがロランによりますと、ゲーテにあっては、「この忍耐づよい、熱心な客観主義」——つまり客観重視の態度(objectivisme)に、「それと両極端をなす創造的精神(l'esprit créateur)」がつけ加わります。われわれはここにも——前述の——分極性 Polarität の一例を認めてよいかも知れません。またこの「創造的精神」は——やはり前述の——「能働的自然」(natura naturans)がゲーテに宿ったものと考えて差支えないと思いますが、ロランはこれらの両極——客観主義と創造的精神——が一体となって働く状態を、インドの芸術家について伝えられる精神状態に他ならない、としています。そこでは、「対象(objet)のなかに主観(主体 sujet)が神秘的に吸収されて、相互的に、objet が sujet になる」ような同化(Identité)の状態が実現するわけです。さきにも引用されたゲーテの言葉ですが、「自分が自然について語るのではなく、自分のなかで自然が語る」という状態がこれに相当するのだと考えられます。

IV

以上、ロランのゲーテ論の第1章のほかに第3章にも触れているうちに、だいぶ時間がたちましたが、これでゲーテ論の全体のなかに、かなり深く入ったのではな

いかと思います。

第2章は、みずから「一つの産み出す自然」、「能働的自然」であるゲーテ自身、このような状態が同時にまたいかに危険なものであるかをよく自覚していたこと——それを主として述べています。それは比喻を用いるなら、「一つの火薬箱」を内部に秘めている状態であり、しかも「火の鍵」をゲーテはいつも自分の手に握っていたこととなります。(これらの比喻はおそらく——前述の——『ファウスト』Ⅰ部、第1幕の終りから採られたのだと思います。) 80才を越えたゲーテが食卓で秘書のエッカーマンにふと洩らした言葉——「もし私がなんの束縛もなしに振舞ったとしたら、私次第で、自分も、自分の周囲のものも、徹底的に破滅におとし入れることだろう。」そして、ここから、ゲーテにとって自制・克己がいかに大切であったかが分かります。ゲーテみずから、「第一に大切なことは、自制・克己を学ぶことだ」と述べています。これに関連してロランは、古典期のゲーテ、さらに晩年のゲーテが東方(オリエント)にたいし、また彼からいえば次の世代にあたるロマン派の詩人たちにたいし、警戒心、嫌悪の情、或は敵意をもったことに言及します。ロランはいくつかゲーテのことばを引用していますが、これについて若干の注釈が必要かと思います。たしかにロランのいうとおり、東方(オリエント)ないしインド、それにロマン派は、「ゲーテ自身が知り抜いている深淵——彼が苦しい努力の末、やっと抜け出したその深淵へふたたび彼をひきずり込むものであった」と言えます。それは要するに、「無形式」(formlos)の世界、或は混沌とした世界(Chaos)、つかみどころのない無気味な世界——多少比喩的な表現をすれば、音楽的な世界——といってよいかも知れません。これに対し、ゲーテがきびしい自己克服によって到達しようとした世界は、古代ギリシアを理想とする、明快な形式の支配する世界、節度と調和の世界——やはり比喩的な表現をすれば、彫塑的な世界ということになるでしょう。青年時代(いわゆる Sturm und Drang の時期)から壮年時代(古典期)へとゲーテの歩んだ道——その途上に、あのイタリア体験があるのですが、この道はまさに「形式のない世界から」「形式の支配する世界」への道だったと言えます。これに対して、東方(オリエント)、インド、ロマン主義、それにゲーテが晩年に接したあのベートーヴェンのデモニーッシュな音楽は、彼にとっては、一つの逆も

どりを意味した、と言えます。そこに晩年のゲーテの恐怖があった——これがロランの解釈です。ロランの著書『ゲーテとベートーヴェン』については最初に触れましたが、これは以上のような解釈にもとづいて、ドイツ最大の詩人が、20才年下の、ドイツ最大の音楽家の強烈な魔力にたいし、必死に抵抗するさまを興味ぶかく叙述したものであります。

しかしインドはともかく、東方（オリエント）につきましては、ロランの引用するゲーテの激しいことは、「私は本来、すべてオリエント的なものを憎む」が1804年に由来することに注意を要します。といいますのは、それから十年ばかりたちますと、昔のペルシアの詩人たちの素晴らしい詩がドイツ語に訳され、ゲーテはすっかりそのとりこになり、自分でもこれらの詩を思わせる詩を次々に書きます。それが『西東詩集』と呼ばれるもので、そのうちの傑作の一つから、実は、このゲーテ論の中心テーマである「死して、成れ」の一句が採られています。これについては後程さらに触れることにして、いまはゲーテ論の第2章に帰りますが、ゲーテの自制・克己は、自分との激しい闘いを意味しました。一方で、あるがままの自己を主張しようとする欲求が強いだけに、この闘いは非常な苦しみを伴いました。それを告白するゲーテのことはロランはいくつも引用していますが、とくに印象ぶかいのは次のようなものです——「鎚（ハンマー）になることは、誰にとっても、鍛床（かなしき）になることよりも名誉なこと、願わしいことに思えるが、しかし漣しなくくり返される打撃をじっと堪え忍ぶのには、いかに多くの力が必要であることか。」ロランはこれについて、「本来、鎚になるようにできた人間が、鍛床になることを学ぶ。そして打撃を加えることよりも、打撃を受けることが百倍も力を要することを認めて、みずからを慰めている」と理解しています。

ところでロランはこの個所に注を付して、この「鍛床」はゲーテ自身のいう「性格の絶対的なもの」と同一視しています。さりげない注ですが、これは重要だと思います。といいますのは、「性格」（caractère, Charakter）は元来「刻印」を意味するギリシア語で、ここから「特性」という意味も出てきます。いまもし「刻印」するものが、運命とか神とかであると考えますと、「性格」という語はいっそう深い意味をおびて来ます。とにかくそれは、われわれ個人、個人が生れながらもつ

「基本的なもの」、「根源的なもの」であり、外的な力によっては、容易に変化させられたり、破壊されたりはしないものであり、とくにゲーテにあっては重要な概念であります。（たとえば、性格は才能や知識とは別にあって、むしろそれらを生かすもの、とされます。）そしてわれわれはここで、ロラン自身が、まさにこのような深い意味での「性格の人」であったことを思い出してよいでしょう。あの老マルヴィーダが20才代のロランについて、すでにその将来をはっきり予言したのは、彼ロランがまさに、ここにいう意味での「性格の人」であったからだと思います。

ところでロランは、このゲーテの苦しみを多くの人びとは知らない、と言っています。そして75才の老ゲーテの次のような告白をあつい共感をもって引用します——「人びとはいつも私を幸福の特権者とみなした。そして私自身も苦情をいったり、自分の生涯についてとかく言うつもりはない。しかし私の生涯は結局のところ労苦と仕事以外の何ものでもなかった。私ははっきり言えるが、75年のうちで本当に安楽な四週間ももたなかった…」さらにゲーテのことばとして、「絶望することのない者は、生きる資格がないのだ。」また、「すべての慰めは賤しい。ただ絶望だけが義務である。」この「雄々しいベシミズム」（ロラン）——ここにわれわれはロラン自身の、あの独得のヘロイズムを感じとってよいかと思われます。

しかし一方、ゲーテはあくまで勇気を失いはしませんでした。彼にとって勇気は第一の美德でした。ロランは述べています。「勇気にかけてゲーテは決して不足しなかった。彼の死の二年前に、ある大きな悲しみの日〔ロランの原文では「翌日」（au lendemain）とありますが、これは何かの間違いです。くわしくは、大公妃ルイーゼの亡くなった1830年2月14日の当日〕に、81才になるこの老人は立ち上って言った、『私たちが光りをもっている限り、私たちは頭をあげているだろう。そして私たちはまだ制作、創造しうる限り、屈することは不可能だ』と。——われわれはここにも晩年のロラン自身の心境を感じとってよいかも知れません。

さて、こうして自己を抑制し、克服しようとするゲーテは多くの誤解（たとえば、無情・冷淡・エゴイストといった人びとの批評——実は、20才のロランも老ゲーテをこのように見たわけですが）受けつつも、みずから鎧で身を固めて自分を守り

ました。それは結局、何のためであったのか？ — それは「より高い自己形成」、
「自己完成」のためでありました。ここでロランのゲーテ論は次の第3章に入ります。

V

第3章に入りますと、いま述べた「自己形成」、「自己完成」がゲーテ自身によって「自己の存在のピラミッド建設」というふう形容されていることが分かります。これは83年にわたるゲーテの全活動を集約する見事な比喩であります。彼ゲーテがこれを口にしたのは、1780年、31才の時、これはワイマルで政治家、行政官としても多面的な活動をし始めて間もない時期にあたります。すなわち或る友人にあてて、「私の存在のピラミッド — その基礎はすでに私には定められ、据えられているのだが — この存在のピラミッドをできる限り高く空中にそびえさせようという欲求が、他の一切のものを圧倒し、ほとんど片時も忘れることを許さない…」と書きました。（このピラミッドの代りに、私たちは、天空に無限に伸びゆく尖塔をもつ壮大なゴシック様式の教会を考えてもよいでしょう。ゴシックは若いゲーテとその世代がとくに好んだ建築様式です。）ロランはゲーテが文字どおり一切の体験をこのピラミッド建設のための石材に利用したことを美しく叙述しています。こうして詩人・著述家・政治家・劇作家・宮廷人・自然科学者・行政官・教育者である一人の人間 — 「人間のなかの人間」が形成されるわけです。このゲーテをロランは「人生の建築師」とも形容しています。しかしここで注目すべきことには、ロランはこの建築のいとなみは、ゲーテという一個人の自由意志から発しているのではなく、ゲーテ自身がその一部分であるところの、「自然」のいとなみである、と指摘しています。ゲーテという存在と「自然」との間には深い近親関係があるわけで、これは先にもくり返し述べたとおりです。「自然」という大宇宙と、ゲーテという小宇宙の照応関係に他なりません。

ところで、この「存在のピラミッド」に完成というものがあるか、という、答えは「否」です。「存在のピラミッド」を一段、一段高めてゆく — つまり前に述

べた「上昇」（自然のいとなみの第二の基本原理！）の仕事は果てしなく続きます。（ちなみにロランは、その永遠に高めてゆく力——上方への引力は、『ファウスト』の、例の「永遠に女性的なもの」つまり「愛」であるという、ひじょうに興味ぶかい解釈を暗示しています。）完成を目指す努力は無限につづきます。しかし一方、われわれの人生は有限であります。したがって、この現世では「存在のピラミッド」建設の仕事は終わりません。そしてこのことからゲーテの不死の信仰が生まれます。つまり人間は、現世での死とともに、姿を変えて、さらに仕事をつづけるというゲーテの確信がそれです。われわれはここで、すでにゲーテ論の最後の第4章に入りますが、そこには80才のゲーテが秘書のエッカーマンに語った有名なことばが引用されています——「もし私が私の最後まで休むことなく活動して、現在の生存形態が私の精神にとって十分でなくなれば、自然は別の生存形態を私に与えてくれる義務がある。」不死、死後の存続の信仰の根拠は宗教と哲学がいろいろ与えてくれますが、ゲーテは「活動」(Tätigkeit, activité)という、いかにも彼らしい概念から不死を確信するわけです。

VI

さて、この第4章はロランのゲーテ論のしめくくりとして特に重要であります。ここでは、「死して、成れ！」という、ロランにとってはゲーテのいわばエッセンスが、さまざまな角度から論じられます。そしてそれは、同時に、ロラン自身のことを語っている、とも言えます。すなわち、ロランのいうとおり、「ゲーテの作品と生涯が示す思想の広大な野のなかから、各自が自己の本質に似かよったものをとる」のであり、そしてロランの告白するところでは、この「死して、成れ！」という根本思想は、「たとえそれが〔ゲーテの〕唯一の炉ではないにしても、ロランの生命はいくたびとなく、そこで己が焰を養った」からであります。

この「死して、成れ！」という一句を含む詩は、さきに——ゲーテと東方（オリエント）との関係について触れた際に——名前をあげました『西東詩集』に含まれています。1814年頃、古いペルシアの詩が独訳され、これが老ゲーテの詩心をあらたにかき立てることになった、と申しましたが、その場合とくに重要な詩人は14

世紀のハーフィスであります。ゲーテはこのペルシアの大詩人の生涯と自分の生涯との間にいくつもの類似点を見出して驚いたようです。たとえば宮廷詩人ハーフィスは蒙古のチムールの侵入による動乱を体験しますが、これはゲーテにおけるナポレオン戦争に相当するというわけです。ゲーテは古いペルシアの詩に似合うものをドイツの宮廷詩人として創造してみようという気になりました。そこへ老ゲーテの新しい恋愛体験が加わったことも重要です。ところでペルシア語で詩集のことを Divan と呼びます。ゲーテはこれに「西と東の」という形容詞を付して、自分の新しい詩集を「西と東の Divan」と呼びました。つまり『西東詩集』です。全体で12巻からなりますが、詩想の新しさと深さ、表現の美しさにおいてゲーテの詩業の最高傑作とみられます。その第1巻（「歌人の巻」）の結びの詩は「浄福なあこがれ」（Selige Sehnsucht）と題され、これが問題の詩であります。『西東詩集』のなかでも最上のものとされています。神秘的な詩でいろいろの解釈が可能ですが、その内容をごく簡単に申しますと――

一匹の蝶（或は蛾）がローソクの光（焰）に恋い憧れて、否応なしにひきつけられ、その光（焰）のなかに飛び込んで身を焼きこがすことを歌っています。ローソクの光（焰）は、より高い存在を象徴し、身を焼きこがすというのは、現在ある自分を放棄、否定してより高い存在と合一する行為をあらわす、と考えられます。これが「死して、成れ！」の深い英知ですが、このような真理は一般の群集には無縁であり、その嘲笑を受けるだけであるから、ただ少数の賢者にだけ打ち明けるがよい――このように老ゲーテは説きます。実はこの詩の素材になるものが、前述のペルシアの詩人たちの作品や、他のたとえ話にもありまして、すべてがゲーテの創案ではないとされています。ゲーテは自分自身の体験にもとづいて、これらの素材を銕なおしたと言ふべきでしょう。もともと、事物が絶えず姿を変えて新しい事物になる、というのがゲーテにとって「自然」の――また「生」の本来のあり方でありました。この考え方は、ゲーテにあっては、植物や動物の形態学（モルフォロジー）的研究によっていよいよ確かなものになりました。さきにも少し触れましたが、いわゆる「変態」、「変形」（メタモルフォーゼ）の思想です。いまわれわれにとって興味ぶかいのは、ロランがこの詩の根本テーマ

「死して、成れ！」を社会現象にもあてはめ、ここから、フランス革命に始まり、ナポレオンを戦争を経て、ドイツ統一運動が激しくなるまでの期間——それは大体1790年から1820年までの約30年間ということになりますが、この期間にゲーテがみせた政治的姿勢を解釈していることです。ここにはゲーテ自身のことばが数多く引用されています。元来、18世紀のドイツの政治的・社会的状況は、イギリスやフランスといった先進国にくらべ著しく封建的で、大小無数の専制君主が支配をほしいままにしていました。それでドイツの知識人たちの多くが、ライン河の彼方の革命運動にたいし、最初はひじょうな感激をみせます。それはあの「自由・平等・友愛」のスローガンを思い起こせば十分に理解できることです。しかしゲーテははじめから冷静でした。「革命は悪しきものと同じ位、よきものを破壊する」という意味のことばがロランによっても引用されています。そしてフランス革命がさまざまな残酷な様相を呈してきた時の、ゲーテの嫌悪はいうまでもありません。やがてナポレオン戦争が終わると、ウィーンのメッテルニヒが指導する反動体制がヨーロッパ全体を支配します。この中であってドイツの知識人たち——とくに、ナポレオン戦争で祖国のために勇敢に戦った学生たちが活潑なドイツ統一運動を起こします。これはそれまでの大小の封建君主たちを支える古い体制を打破することを意味しますから、この統一運動にはきびしい弾圧が加えられます。——こういう事態の中で人びとの眼はワイマルのゲーテに注がれるわけです。しかしゲーテは保守的な態度をくずしません。ゲーテにたいする失望とともに、当然、彼にたいする攻撃が起こります。反動主義者、祖国への裏切り者、エゴイストなどのレッテルが彼にはられます。これにたいしゲーテが周囲の人びとに向かって自分の立場を弁明した多くの例があるのですが、それをロランがいくつも引用しています。

ゲーテは——さきに何度も述べましたような自然観をもっていますから——社会もまた、一つの「自然」として、時と共に変わってゆくべきものと考えていました。しかしゲーテはあくまでリアリストであり、とくに、ドイツの発展過程はフランスのそれと必ずしも一致しないことを冷静に見抜いていました。フランスで必然的であるものは、そのままドイツでも必然的であるとは限らない、それを無視してフランスでの革命をそのままドイツで真似ることをゲーテは承認できなかった、というわけです。

ロランはこのことを20世紀の現実に結びつけて強調します。これに関連した1824年1月4日の、エッカーマンとの長い対話をもロランは — いくつものに分解して — 引用しております。(なおロランはそこで、ゲーテ自身の認識はすでに狭苦しいnationalなものをはるかに越えて、internationalなものに到達していたことを指摘しています。味わうべき言葉だと思います。)さらに1813年の、ハインリヒ・ルーデンによる長い報告も引用されています。これも有名なものであります。ルーデンは当時イェナ大学の若い、哲学と歴史学の教授でしたが、ドイツ統一運動には関心の深かった人物で、彼は或る政治的な雑誌の発行を計画し、そのために、ワイマル政府の実力者であるゲーテの庇護と協力を求めました。ゲーテはこれを拒絶するのですが、その機会に、ドイツ民族の現状と将来についてゲーテは自分の考えを切々と説きます。要するに、「ドイツ民族の前途はきわめて有望である。しかし現状ではドイツの民衆の国民として[・]の自覚はまだ十分とは言えない。そこで将来にそなえて、まず地道に準備をすることが大切だ。それは何よりも教育の普及にある」といった趣旨です。ゲーテはこういった認識に立つが故に、現実の政治問題・外交問題には、あえて沈黙を守った、また守らざるをえなかった、それは — ルーデンの言葉ですが — 「人間と事物を彼ゲーテが正確に知っていたために、彼がとらざるをえなかった悲痛な諦めに他ならなかった」というわけです。ゲーテのこのような本当の姿を知った青年ルーデンはひじょうに感激し、別れる時には目に涙をいっぱい浮かべていた、といいます。

一般にゲーテの政治思想といったものは簡単に要約できません。ましてや、現実に生きる政治家としての彼の言動をすべて矛盾なく説明することは不可能に近いでしょう。フランス革命にあれほど関心の深かったロランのことですから、おそらく「ゲーテとフランス革命」という問題には、人一倍、興味をもっていたのではないかと思われませんが、このロランは、「革命のように重大な種々の政治問題に関して、一見したところ彼[ゲーテ]の意見が変わる」ことがあるのをよく知っています。ゲーテのいくつかの発言は、革命を恐れず、これをも肯定するかに見えます。ロランはそれらの発言も引用しています。

結論としてロランは、ゲーテの真理愛が彼の言動のより深い根底にひそんでいる

と理解します。真理、真実。これだけはゲーテにとって絶対であった、とみるわけ
です。「私〔ゲーテ〕は有益な誤謬よりも、むしろ有害な真理をえらぶ。」また、
「有害な真理もまた有益である。なんとすれば、それは一瞬間しか害を及ぼすこと
がなく、むしろ常に有益——しかも非常に有益になるにちがいないような他の真理
に通ずるからである。逆に、有益な誤謬は有害である。なんとすればこれは一瞬間
しか益することがなくて、ますます有害になるような他の誤謬に誘い込むからであ
る」といった引用があります。ゲーテは——ロランが指摘するとおり——同じ趣旨
のことばを生涯、何回もくり返しますが、これらの言葉は、他ならぬロラン自身に
いかにも相応しいものだと思います。ロランは省略していますが、いま最後に引用
した言葉のすぐ前のところで、ゲーテは次のように断言しています——「真なるも
の以外に偉大なものはない。そして最も小さい真なるものでも、それは偉大である。」
これもロラン自身のことばとして少しも不自然ではありません。さらにロランはゲ
ーテについて、「けっして嘘を言わなかった文学者」という性格づけをしています
が、これこそまさにロラン自身についてあてはまる言葉でありましょう。ロランが
ゲーテにひきつけられた理由の一つは、このあたりにあったのかも知れません。

しかしロランは、「真理はつねに前方に、来たるべきものの中にあり、けっして
死んだものの中にも、すぎ去ったものの中にもない」と考えます。これは、「真理
は各人がたえず自分で努力して獲得してゆくべきものだ」という意味に解されます。
死を直前にした老いたるファウストの不滅のことば、「自由も生活も、日々それら
を克ちとる者だけが、それらに値する」という言葉をロランがここで引用して、こ
れこそ「私たちの旗印しである」と述べていますが、この「自由」と「生活」を「真
理」という語でおき代えれば、真理についてのロランの考え方はよく理解できるよ
うに思います。ところでこの「真理」獲得の闘いは無限につづくものです。それを
ロランは一つの革命——「恒久の革命」とみなそうとします。そしてそれが、
ワイマルの現実の政治家としてのゲーテからではなく、『ファウスト』の作者ゲ
ーテからわれわれが学ぼうる教訓である、とロランが言っているように思われます。
その「恒久の革命」の道では、われわれは、ロランのいうとおり、「進み、倒れ、
起き上がり——行動し、働き、格闘し、仕え——それから後に破壊され——そして

また開始する」わけです。これはまさに『ジャン・クリストフ』を流れる根本思想であります。これをロランは、彼のゲーテ論のなかでは、

「死して、成れ！」

という老ゲーテのことばを借りて、われわれに語りかけているのだと思います。

(後記。これは1976年7月11日、ロマン・ロラン研究所の主催で関西日仏学館において行なわれた講演の再録である。)

索引：ロマン・ロラン著作中の「ゲーテ」 (編集部)

1. この索引は、ロマン・ロラン著作中の人名索引「ゲーテ」で、ロマン・ロラン全集(みすず書房刊)を典拠として、このたび新しく作成したものです。
2. 《例》 人名「ゲーテ」が『ジャン・クリストフ』の、全集版で第②巻の、73, 75, …ページに引用されていることを示します。

ジャン・クリストフ ② 73, 75, 240, 416 ③ 172, 332, 340, 390, 407 ④ 178, 194, 魅せられたる魂 ⑦ 227 ベートーヴェンの生涯 ⑬ 30, 31, 32, 33
ミケランジェロの生涯 ⑬ 192 トルストイの生涯 ⑬ 275, 307, 313, 320 ミレー ⑭ 18 マハトマ・ガンジー ⑭ 257, 258 ヴィヴェカーナンダの生涯と普遍的福音 ⑮ 377 ベギー ⑯ 414, 570, 579, 595 回想記 ⑰ 35, 43, 112, 113, 118, 119, 121, 171, 217, 227 内面の旅路 ⑰ 274, 281, 385, 401, 409, 418, 419, 421, 435, 440, 505, 506, 560, 575, 584, 593, 610 戦いを超えて ⑱ 11, 12, 33, 83 先駆者たち ⑱ 205, 239, 240, 253, 273, 276, 281 闘争の十五年 ⑲ 379, 490, 522 革命によって平和を ⑲ 661, 664 民衆劇論 ⑲ 4, 42, 45, 47, 71, 83 道づれたち ⑲ 139, 140, 145, 178 [ゲーテを標題とした論文《死して、成れ!》

192-210] 230, 232, 237, 240, 252 ジャン・ジャック・ルソー ㉑ 305,
 307 近代抒情劇の起源 ㉒ 186, 289 今日の音楽家たち ㉓ 387, 404, 411,
 419 過去の国への音楽の旅 ㉔ 143, 168 ヘンデル ㉕ 255 エロイカからア
 パッショナータまで ㉖ 9, 25, 35, 136, 180, 215 ゲーテとベートーヴェン ㉗
 [ページ省略] ベートーヴェンの恋人たち ㉘ 368, 371, 389, 409 ベートーヴェン
 への感謝 ㉙ 417 復活の歌 ㉚ 13, 22, 25, 47, 67, 75, 103, 106, 107, 108, 109,
 130, 152, 233, 290, 318, 345 第九交響曲 ㉛ 79, 105, 121, 134 フィニタ・コ
 メディア ㉜ 377, 380, 394, 395, 431, 433, 435, 436, 439, 447, 463, 475, 479,
 494 戦時の日記 ㉝ 11, 44, 45, 46, 84, 92, 100, 120, 188, 206, 211, 254, 332,
 343, 351, 362, 363, 369 ㉞ 29, 40, 99, 116, 160, 171, 196, 225, 246, 274, 371
 ㉟ 106, 138, 164, 185, 191, 236, 245, 295, 298 ㊱ 18, 83, 126, 171, 178, 182
 ㊲ 55, 142 インド ㊳ 112, 201, 211, 308 ユルム街の僧院 ㊴ 43, 81, 193,
 244, 245, 362 マルヴィーダ・フォン・マイゼンブークへの手紙 ㊵ 390,
 391, 393, 415, 424, 437, 448, 455, 468, 469, 477, 483, 484, 486, 506, 517, 547
 アグリゲンツムのエンベドクレス ㊶ 631, 632, 643, 647 ローマの春 ㊷ 183,
 215, 220, 247, 251, 252, 275, 291, 299, 349, 374, 377, 382, 522, 528, 548, 575
 したいソフィーア ㊸ 14, 40, 41, 58, 67, 115, 127, 131, 145, 171, 172, 200,
 220, 237, 238, 291, 331, 337, 359, 369, 371, 380, 401, 402, 409, 449, 457, 475,
 598, 604, 605, 606, 613, 622, 632, 633, 638, 639, 644, 646 日本人への手紙
 ㊹ 38, 40, 64, 108, 113, 114 タゴールとロマン・ロラン ㊺ 181, 194, 195, 274
 ジャン・クリストフからコラブルニオンへ ㊻ 373, 381, 411



《ロマン・ロランに関する国際シンポジウム》 に参加して

宮本正清

ロマン・ロランに関する国際シンポジウムが、ロランを生んだブルゴーニュ地方で催されるので、私もそれに参加してはどうかという勧めの手紙が、昨年1月ごろに着いた。その研究会がどのような雰囲気なのかで催されるか、ロランの人物と作品に対する、ロラン研究者たちの態度や業績のことも知りたかった。3月19日と20日、わずかに2日にわたる催しではあるが、出席するなら急いで、諾否をロラン夫人にまで連絡しなければならない。妻と私は、あわただしく準備にかかった。旅支度はかんたんである。わずかに2週間の旅行にすぎない。私にとって問題は、シンポジウムで、何をどんなに扱うべきか、ということだった。私は急いで、ロラン夫人の希望を知りたかった。

彼女の返事はかんたんで、明瞭だった。私はもっぱら日本におけるロランについて報告すればよい。たとえば、私たちが実現したロマン・ロラン全集の刊行である。日本ロマン・ロランの友の会の設立である。また、京都に於ける「財団法人・ロマン・ロラン研究所」の誕生である。私はこれらの問題について、単純な報告をかけた。そして、ロラン夫人の希望にしたがって、この研究所の建物の内外を写真に写して、美しいスライドを50枚ほどとのえることができた。私の「手土産」はこれで揃った。

私たちはパリにつくとさっそくロラン夫人に電話をかけて到着を知らせた。私たちのホテルから遠くないモンパルナスのお宅に夫人を訪ねて、研究会に行く手筈をきめた。折あしく、フランスでも交通機関のスト中で、汽車が規定どおり動くかどうかかわからない。しかし、何でも、できることをやってみる以外に道はない。私たちは、明日午後4時半、モンパルナス通りで、落合うことに決めた。そして、ドイツの友ランスメドック博士の車に乗せてもらう事にした。ところが、ロラン夫人は、私たちの旅の友となるはずのドクターに私を早く紹介しておきたい。小雨の中を、

フランス風にぬれながら、ほど近い街に彼を訪ねることにした。R. 夫人は私を子供のようにかばってくれる。

ドクターの住居は魅力に充ちているし、主人のお客の来訪をよろこぶ猫の魅力もまたそれに劣らないが、先づ肝腎の旅立ちのことを決める。4時半出発に異議なし！

ドクターとR. 夫人に別れて、私は昔とは勝手の変ったモンパルナスの地下道— 迷宮のように長い、間違いやすい地下道を歩き、やっと地下鉄を乗りかえて、ホテル・リュテシアに近い駅に辿りつき、仮りのわが家を発見した。やれ、やれ！20余年の昔に比べて、パリはしんどい！

翌朝、私はもう未明に眼ざめ、起きて、仕度をととのえた。リュテシアからモンパルナスまでは、徒歩でもわずかな時間だ。

落合ったのは、パリ大学の教授ルヴェルス氏、フランスの西部ブレスト大学のデュシャトレ教授、ランスメドック博士と私たちで5人。

私たちはピクニックに出かける子供のように楽しい会話ははずんだ。しかし、路は遠く、話題も少くなる。黙して周囲の風光に見とれ、快く眠ることさえできた。お腹がすく。日がとつぷり暮れたが、ヌヴェールの町へは遠い。

やっと私たちが辿りついたのは、もう9時半を過ぎていた。ロラン夫人をはじめ、おそい晚餐を終りつつあった。20余名の会員たちは、私たちの到着を知って、歓声をあげて、迎え、ぶじを喜んでくれた。ことに、ロラン夫人は、「あなた方は事故でも起きたのではないかと、心配していましたよ！」とくり返して、無事を祝ってくれた。かんたんな夕食をとると、すぐ近くにあるホテルで、ゆっくり眠ることが、残された唯一の望みだった。新築らしいホテルPLMは、サービスも良くて、快適である。やれ、やれ！ぶじに辿りついた！

明朝は、シンポジウムを9時30分から始める。お休みなさいを交わして、何よりもほしい休息へ……

ホテルの朝食は、大河ロワールの静かな流れを前にした二階のテラスでとった。フランス又はヨーロッパの旅で、朝のよろこびは味のコーヒとパンであるが、今朝は、澄みきった青空と、天地をみだし光り輝かせる太陽が、先づ私たちを迎えて

くれた。ロランを愛し、彼の精神を生きる原理とする人々にとって、それに優る接待はないと私は思った。

研究発表は、ロラン夫人の立案と指図に従って、9時半を廻ってから始められた。日本風に云えば、ブルゴーニュ県の県庁所在地、ヌヴェール市の文化会館においてである。この会館の理事長であるアリス氏の開会の辞で幕が開けられた。

まず最初に、作家アラゴンに代って、アルベルチニ氏が、ロマン・ロランに関して現代の大詩人、アラゴンのいくつかの文章を読んだ。以下、発表者名のアルファベット順で報告がなされた。

- ・ブルム夫人（ジュネーブ大学教授）

「『狼』とドレフェウス事件」

- ・ディスカルノ夫人（ジェーバ大学教授）

「ロランとイタリアの関係」

- ・ドボシ氏（ブタペスト教授、パリ・ハンガリア会館々長）

「ロランと一ハンガリア貴族、ミシェル・キャロリ伯との友情」

- ・デュシャトレ氏（プレスト大学教授）（フランス）

「ジャン・クリストフにおける社会主義」

- ・ヨシモヴィチ氏（ベオグラド大学教授）（ユーゴスラビア）

「ユーゴとロラン」

- ・ヒルシュ氏（シュウド・ホン図書館長）（スイス）

「スイスにおけるロラン」

- ・ルヴェルス氏（パリ大学教授）

「詩人ジャン・ピエール・ジュウブとロラン」

- ・アリス氏

「ロランの演劇精神」

第2日目

- ・ニイペール氏（アメリカ）

「ロランのアメリカ人への手紙」

- ・モーディク夫人（ザグレブ大学教授）

「ロランと演劇」

・ランスメドック氏

「ドイツと戦時のロラン」

・宮本正清

「日本におけるロラン」

・モケイロバ夫人

「ロランとソヴェトの作家関係」

このプログラムで2日間にわたって、活ばった討論が信頼と尊敬にみちた雰囲気で行われた。

昼休みには、階下の食堂で、賑かな、楽しい昼食をとった。それは私の好みに合う食事で、よい料理とぶどう酒、愉快的な会話があった。

私は、大体次のような事を述べた。

終戦後の、疲れた日本人が、魂の底で求めたのは、愛、友情、信頼、社会的正義であった。それらの温かい光こそ、ロランが終生求めて己まなかつたもの、また、敗北のあとの空虚の中で欲しいものであった。私たちは、ロラン夫人の勧めに従って、「日本ロマン・ロラン友の会」を設立した。その生れたばかりの会が計画したのは、片山敏彦氏を中心として、若い、多くの同志の協力によって、ロマン・ロランの著作を翻訳出版することだった。一見無謀に思われた、この大計画も、同志の誠意ある一致協力と、出版者の犠牲的努力のお蔭で、完成された。

ロラン夫人の希望に従って、今回の私の発言の中心は上の通りであり、最後のしめくくりとして、「財団法人ロマン・ロラン研究所」の設立を報じて、今回のシンポジウムに参加した国々の友たちが機会を得て、われわれの集いのセンターを訪れるようにと、ロランの名において述べた。そして、これもまたロラン夫人の希望に沿って作成されたカラーのスライドは、ことその他、会衆一同を喜ばせた。ロラン夫人を除いては、誰ひとり、日本家屋のデリケートな美しさを知らなかったからである。

最後、市観光会館に於いて、下院議員でヌヴェール市長ブノワ博士による、我々のためのレセプションが催された。席上、最も遠い国日本から来た私に、ヌヴェールの伝統工芸であるボンボン入れの陶器が、贈られた。

「この贈物はわたしたちヌヴェール人の、あなた達への感謝のしるしです。」

R. R. のための覚え書き No. 1

椿 充 代

戦争と平和の二者選択の前に、平和を選ばない人はあるまい。しかし、日本人は「平和と水を、ただで手に入れることができると思っている類い稀な人種」であるらしい。水のことはおくとして、また、国防問題に触れようというのでもない。しかし「平和」を口にする時には「何から何を守ることなのか」を考えておかねばならない。小学生のころ、理科の時間に「害虫と益虫を分ける基準は？」と質問したのに対して「人間にとって害があるか、役に立つかによるのだ」と答えられた時に、「人間こそが害虫の部に入るのではないか？」と感じた素朴な疑問を思い起こすものである。敵は自らの内にあるのか、外にあるのか。主語のないかけ声は要注意である。『期待される人間像』と同様に、誰にとっての平和か、誰にとっての期待像かを問う必要がある。

平和とは戦争の無きことならず。そは魂の力より生まるる美德なればなり。

(スピノーザ)

「美德」とは何だろう。社会規範としての「道徳」という言葉に反感を覚えていた私も立ち止まらざるを得なかった。「魂の力より生まるる」とある。「魂」とは？「魂の力」とは？……強要されるものではなさそうである。

「学生らしく」「女らしく」と、強者の弱者に向って説く内容にも2通りある。前者は、人生というのは各々の時期になすべきことを全力投球して積み上げてゆく

ものだという善意に解すれば、学生でなくなる時期への意欲も生まれてくるものである。しかし、後者は生きている限り続くものであり、誠意や努力では取り除くことのできない罫である。この違いを見失ってはならない。男が要求する「女らしさ」や、女がそれを受け売りにする「女らしさ」ではなく、女自身が能動的に築いてゆく「女らしさ」にならない限り、認めるわけにはゆかない。

……（これまでの文学作品における）女性の姿はしばしば魅惑的あるいは感動的である。しかし、その精神構造はほとんどつねに弱々しくてわざとらしい。……たいていの場合、女性のタイプは次の三つに帰結する——男が手に入れたいとおもう女性、男が自分のものだと信じている女性、男がもののできない女性である。表現されているのは、たんに男性の欲望か承諾か恐れかであるにすぎない。ほとんどつねに女性ではない。女性じたいとして見られた女性ではない。（1912年）

「人間」イコール「男性」ではなくて、「人間」の範疇に「男性」と平等に「女性」も加入することを、ごく自然なこととして生きたのが『魅せられたる魂』の女主人公アンネットである。「女性」もが、イコール「人間」である生き方である。この当然の生き方が珍しい現象に見えること自体に、現在までの歴史のゆがみを感じるのである。

『ジャン・クリストフ』に比べて、この作品に低い価値しか与えない人もあるようであるが、男性であるロランが、アンネットという女性に託した意味の深さを理解した上でのごとくであろうか。人生態度そのものの問題である。

一般に思想といえば、生のなんたるかを理解し、未来を予見するために、知的に、また客観的に人生を省察することを教えるものであるが、ベートーヴェンには、こういう思想自体の価値にはなんの興味もなく、思想によって影響された精神状態にのみかれは関心を示している。……

ベートーヴェンにとって、観念が意味を持つのは、それらを表現する人間の人生態度がどんなものかを知るための手掛かりになるからであった。かれは、純然たる「観念の世界」にはいささかの関心もみせていない。純然たる観念、「抽象的」な思想は、単に人生態度を間接的にしか表現しないものである。べ

ートーヴェンの興味をひいたのは、その人生態度にほかならなかった。……

(サリヴァン『ベートーヴェン』)

ロランを思想的に分析し評価するのではなく、作品に投影された作者の人生態度から学び取るための読書をしたいものである。

『魅せられたる魂』の「新版への序(1934年)には、新しい段階に進んだロランが、勇気ある一步を踏み出すいきさつが記されている。

『コラ・ブルニョン』の、1914年5月附の「読者に告ぐ」のなかで、私は『ジャン・クリストフ』の「甲冑をつけた十年の窮屈さ」について語った。「この甲冑は、初めは私の寸法に合うように作ったものだが、とうとう狭すぎるようになったのであった。」それに対して抵抗の必要が生じた。私はそれを「ゴール風に自由で陽気な」この作を通じて行った。この作はすでに着手されていた他の諸作に先んじてなされた。

それらの諸作の一つは「『ジャン・クリストフ』のように少し悲劇的な雰囲気をもった」小説であった(私は今日ではこの少しという緩和的な言葉を除くことができる。というのは20年この方、悲劇的なものが世界の上に怖ろしくおしかかってきたからである。)——その小説が『魅せられたる魂』であった。この魂は創造の闇の底で、蠢きはじめていた。

『ジャン・クリストフ』の最後の巻のはしがきは1912年10月の日附になっている。同じ年の同じ月に、決して休息を知らなかった精神は次のように誌していた。

「善も悪も拡大しなければならない。」

そして彼は新しい行動の分野を男性と女性との現代の二世代の矛盾衝突の中に求めていた。この両世代は各々違った進化の段階に達していた……同一の時代の女と男の間には平行ということはない(おそらくかつてなかったであろう。)女性の世代は、その時代の男性の世代に比して、常に一世代の隔りをもって、進歩しているか、遅れているかである……今日の女性は彼女らの独立を獲得しつつある。男性は発酵させつつある……

(1912年手記)

しかしこの生命の「川」は1912年にすでははられ、その源の水を飲んだのであるが、しかし前進を始めるまでに9年のあいだ待たなければならなかった。何となれば戦争の大洋とその血腥い渦巻は喪と紛乱の連続となり、1914年から1920年にわたる年月をみたしたからである。精神は開くに燃え、その噴出が『リリュリ』や『クレランポー』となった。この時代は肉体と精神の危機によって終結を見、1919年から1920年にわたって、病が襲来して、魂と生命を鈍直すにいたった。

1921年に、死んだ魂と生命は投げ棄てられた、「空の封筒のように……死のう、クリストフ、生れ変るために……。」そしてそれと同時に、はからずも象徴的運命によって私はパリに別れを告げた。それまで私は住居をそこに残してあったが、いよいよフランスの外に定住することになった。

私の作品に関する、当時の手記は、知らずして、私の生活にもあてはめうるものだが、こう言っている。

「それらの出来事は機会や口実にすぎない。内面的必然性の手によって、徐々に張られていた発条を外すのがせいぜいその役目である。」

戦前の作品を生んだ旧い住居、旧い町、旧い国を出発することによってページはめくられた……「さらば、過去！……」そして新しい一章がひらかれた。

筆を執る前には、第一次世界大戦やロシア革命に直面し、また「母と子」と「予告する者」の間の期間にはインド思想に傾倒するロランの心の苦しみや成長の過程をいかに理解するか。それは読む者、ひとりひとりの内面の豊かさにかかわってくる。

もし世界が解明できるとすれば、その解明はわれわれ自身のうちに探し求めねばならない。なぜなら、「存在」の底に触れることのできるのは、われわれ自身のうちにおいてだけであるからである。

(1888年『ユルム街の僧院』「真であるがゆえに私は信じる」)

ふつう、歴史的事件を客観的に消化するには半世紀近い時の経過を要すると言われる。そこをロランは、時代の悩みのまっただ中にながら作品にしているのである。まるで「女主人公アネットの生き方を決定することこそが、自分の問題意識

をひも解いてゆくことになるのだ」と言っているようである。そんな生身の人間の叫びとも言える作品を、単に構成力や完成度のみから評価することができるものであろうか。

わたしは1914年と1919年の間に書いた二冊の論文集を読みかえしたばかりである。……わたしがそこから出て来るとき、あたかも戦争と共に終りはしなかった。十七年来あいかわらず続いている長い行程の旅路から出て来たかのようである。

ああ！1914年にわたしの足跡を見失ってしまいながら17年ののちによろやく、わたしが1914年9月に『戦いを超えて』を書いた当時のわたしの出発点に着いて、わたしに追いついたと考えている人たちは、以上のようなことをほとんど思ってもみないのだ！それは休みなき前進の始まりにしかすぎなかったのであるし、その前進中にわたしは、偏見をもぎ離し、^{イラツヨソ}迷妄をはぎ取り、友情を寄せ集めるというわたしの道の種子をまいてきたのであった。……しかもわたしは目的に到達してはいないのだ！……

目的に到達するまでの並み並みならぬ苦しみ、悩み。

……一方わたしは、自由で明晰、大胆不敵な個人主義の基盤の上に、^{フエツ}国境なき国際精神の「城塞」を建設するという、希望を保持しつづけている。他方また、羅針盤の針は北を——ヨーロッパの前衛、英雄的なソ連の革命家たちが目指して前進している目的——つまり、人類の社会的、道徳的再建——を指しているのだ！

体験は終らない。この続きについては、他日語ることもあろう。わたしの自由精神の^{フエツ}「城塞」を建設するためには基礎が——自由な人間たちが——どれほどわたしに欠けていたかを語るだろう。一つまみの（これは言いすぎだろう——一にぎりの）独立的な人々を除き、いかにしてかれらがほとんどみんな放棄してしまったかを、わたしは語ることだろう。ヨーロッパにはないので、わたしがいかにしてマハトマに「自由精神」の力づよい更新、新しい行動形式を探し求め見出したかを、語るだろう。それから、いかにして諸事件の進展じたいが、マルクスが経済的唯物論の鉄則に還元した——世界を二陣

営に分け、日ましに国際資本主義という巨人と、もう一人の巨人「プロレタリア労働者同盟」との間の溝を大きくしている。アーナシケー〔宿命〕が、宿命的にわたしをして溝を越えて、ソ連の側へ並ぶようにしていたかを。それは疲労なく苦痛なき前進ではなかった。そして旅路はその終末に達してはいない。けれどもそれは水夫シンドバッドのいくたの旅に値する！そして終点に到達したとき、わたしは言うであろう。

— 「休息こそたたえてあれ！眠れ、わが頭よ、眠れ、わが足よ！おまえたちはよく働いた。道はひどく、起伏が多かった。だがいかにもあれ、道は美しかった。そこで血まみれになるだけの値打ちがあったのだ。」

けっして終点に到達することのない歩みではあろうが、これが「過去への訣別」を執筆した1931年当時のロランである。

そして1933年に『魅せられたる魂』を書き終えた翌1934年の『闘争の十五年』の「パノラマ」には行動への呼びかけが、声高に叫ばれている。

……《抽象における精神》の偶像崇拜が私に催させる嫌悪を、私は多くの論説と和の『魅せられたる魂』の多くの箇所です語ったが、いままでたっても十分には語りつくせないであろう。このような偶像崇拜は、精神をその生みの親である大地から根こそぎにし、現実界の危険と責任からと同時に、力強い樹液——これがなければ精神は厭わしい地虫にすぎなくなる——からもぎ離してしまふ。意識的なものであろうとなかろうと、それは政治の現実上の覇者たちの *combinazioni* (術策) に陥る。彼らはこのような偶像崇拜を奨励する。なぜならば《実地に適用されない知性を具えた耽美家や詭弁家たちの遊戯は諸国民衆の運命が偉大な闘争のなかで決せられる闘技場から知識層を離反させるからである。》——私は何びとにもまして、《戦場を見おろすことを可能にする精神の独立》の戦士である。しかし私には、見ていさえすれば行動しないで済むということは決して承認できない。よく見れば一層よく行動できるものである。人は行動すべきである。レルジスの呼びかたによれば「知識人インターナショナル」つまり精神の奉仕者たちには、社会上政治上の運動から傲然として離反する権利はない。……

ありのままを見る。現実こそが真実なのだから。そして、大切なことは行動に至ることである。現実に不満があれば、不平を言うまえに行動してみるべきである。思考する力と意欲と、そして自らの主体性が必要不可欠であるということが身にしてみるものだ。目を閉じないということだけでも大変なのだから。

ロランは進んでゆく。1935年には『革命によって平和を』を刊行している。

私は自分の思想をふたたび調べてみた。思想の一つ一つに「君はどう考えるか。君は誰か」とは尋ねず「君は何をするか。そして、どうやるのか」と尋ねたのである。（「序」）

思考が行動に至るには、計画をもたねばならない。「戦争およびファシズム反対のアムステルダム国際会議のために」の中に「平和闘士連盟への訴え(1932年6月10日)」という一文がある。

個人としての良心的拒否は、戦争への抵抗^{レジスタンス}の第一段階である。

第二段階へと進もう。第二段階とはその拒否が集団化され組織立てられることである。

……われわれは戦争への抵抗の第三段階へと進まねばならぬ。それは一国民がただ「否」と言うばかりでなく、その「否」を実行に移すという積極的で有効な抵抗のことである。

戦争技術の進歩によって、個人的抵抗は無力になってしまっている。

……ガス戦争は戦闘員と非戦闘員とを問わず一様に、いささかの顧慮もなしに殺人ガスをふりかけて滅ぼしてしまうことになるであろう。

広島原爆記念館を訪れてみれば、よくわかるであろう。胸の痛みと背すじの寒さを覚えることなしに見終えた人は、もはや自分が人間社会にとって存在しない方がよいロボットにすぎないと認めるべきである。

第一段階にいるアインシュタインを前にしてロランは言う。

……集団的兵役拒否が有効なものとなるには、あらかじめ強く組織立てられていなければならないということは理性ある人びとのすべてにとって明らかなことであると言わなければならない。ヨーロッパにおいてはそれは組織立てられていない。アインシュタインは良い種子をただ当てもなくまき散らしただけな

のであった。その種子から畑ができるまでには時間がかかるであろう。そして現在われわれのもつ手持ち品の中で最も乏しいものは時間なのである。大殺戮は常にかなる瞬間にも開始されるものである。われわれはそれに対してどんな対抗策をもっているのか。私もアインシュタインと同様に（あるいは彼以上に）戦争に抵抗する手段として、インドのように組織立てられた国民というものがある。それが最も有効なものであると信じる。……否、私としてはそれ以上に、暴力を伴わぬ全面的な「不服従」（Non-Acceptation）の打ち破りがたい力のほうを信じる（私はガンジーとそれに関して長いあいだ話し合ったことがあるが、ガンジーにとっては戦争への抵抗は、彼が必要とする「社会的抵抗」のほんの一部にすぎないのである）。「不服従」とは国民が自分を濫用する国家に対して「否」と言うことであり、社会活動の全面的な休止であり、国家機構の全面的な停止である。……

「暴力を伴わぬ不服従」が滅亡に導くものでないことの条件は何か。また組織における個人の独立とのかね合いはいかになるのか。

かの時代からすでに30余年。技術分野の進歩はめざましいものである。にもかかわらず私達の足もとは「良心的な意志によって固められている」とは言い難い。弱い者が自己の存在に不安を感じることなく生活できる世界、それが平和な世界であるならば、やはり自分の内や外に対する心の強さが必要条件であろう。「魂の力より生まるる」のである。そして、まわりの存在にまで共通項が広まった時には「美德」として輝いてくる。これがロランのいう「ユニテ」ではないかと思うのである。常に新しくなり続けることを「革命」の本質であるとするならば、止まることのない生命力こそが平和のための基である。そう信じて日々の生活を精一杯に生き生きと送りたいと思う。まずは自分にできることから始めよう。

……「始めは半ば以上である」。最初の数歩がのちにはどれほど臆病そうに見えようとも、その数歩がつづいておこるいっさいのことを決定したのであった。賽は投ぜられた……前進せよ！いまやおまえはもう立ち止まることは許されないので……

（「過去への訣別」）

『革命によって平和を』の「エピローグ」は次のように結ばれている。

われわれは平和を望んでいる。平和は社会組織の変革なしには真実なものとなり得ず、また安定したものともなり得ない。革命によって平和を！

1935年3月20日

あとがき

長年、胸の中にたちこめていた霧を、腰をすえて見つめ直そうと頑張ってはみたものの「どうすべきか」という問題が出てくるばかりでした。自分のためのノートの1ページ目にすぎないと思います。ただし、私としては第2ページ以降にこそ自分を投影してゆきたいと望んでいるし、またすでに頭の中は、今回の疑問をいかに展開してゆくかということではいっぱいです。しかしながら、とにかく構成にまとまりのないものに終わってしまったことを申し訳なく思います。

ユニテの広場

ロランは教室になじまない

山口三夫

K君 — まず、この春から復学できるほど回復したことを喜ぶ。もうすぐ会えるわけだが、君の期待を裏切るといけないので、思いついてペンをとります。

それは、これからは二度とロマン・ロランを講義の対象にはしないだろう（あるテキストを読むことはあっても）、ということです。— ぼくがS市へ来てほどなく、君がロランの名において研究室へ訪ねてくれるようになったということもあって、去年の春、思いきって教室でもしゃべることにしたのだったが、五月になるとはや、君が休学を余儀なくされた。そして、ご存知のように、およそロラン的なものには無関心な、敵対的ですからある仏文科の学生たちだ（いつの時代もほぼそうで

あったが)。ちゃんと作品を読んだうえで敵対的ならまだしも(ぼくはむしろ歓迎するが)、気分的にただなんとなく毛嫌いしているにすぎず、しかも単位だけはほしいのだから始末がわるい。

もちろん、S大には仏文科の学生が少ないという現状もからむが、現代日本の気圧状況からして、これはむしろ当然だろう。ぼくが永年心のなかで誓っていた禁を破って講義でもロランをやることにしたのは、やっぱりぼくの誤りでした。ぼくのしゃべり方のまずさをこえて、ロマン・ロラン自身が教室にはなじまないからでしょう。すくなくともぼくにとっては、ロランはそうした存在としてあったし、ありつづけるということです。

いうまでもなく、研究室などで個人的には大いに話すし、仏文科にかぎらない何人かと、定期的に読んだり討論したりする集まりがもてれば、それはそれで望ましいと思う。

文学史は今年は二十世紀で、前期はぼくが担当するから、当然ロランも出てくるが、個別的には講義の対象としなかつもりだということです。日本の気圧状況が変わっても、教室のなかではロランは分からないでしょう。こちらが情熱的になればなるほど、教室がシラけるような(教授会でもそうだが)、現在の大学ではなおさらです。ぼくが、自主ゼミで大学を埋めつくせ、と主張しているゆえんでもある。

君の回復を喜び、とりあえず自己批判をこめて、このことを知らせておきたかった。君はまず、翻訳もふくめて、もっとロランを読むことが大切だと思います。もちろんロランだけではダメで、幅広く読まなければならないが、君の精神にはある方向性が芽生えているのだから、あせることはない、じっくり前進をつづけたまえ。持続こそ生命です。



「ノート」

名 倉 美津子

十人十色と言われるように、人の価値観は一様ではないが、……私は人の心に価値を求める。立派な政治家であろうが、偉大な発明家であろうが、優れた医者であろう

が、上手な音楽家であろうが、私にとって大切なのは、その人が、どんな技術を持ち、何をしたかではなく、どのような心の持ち主であるかと言うことだ。そんな意味で、私はサン・テグジュペリに心惹かれた。彼の小説に表現されたヒューマニズムが、私の求めるものと非常に類似していたからである。しかし『星の王子様』や『人生に意味を』といった作品を読んでいるうちに、もっと昔、私が触れ、感動を呼び起こされた作品があったことを思い出した。それがロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』である。幼い頃、私は病気がちであった。熱が出やすく、すぐに風邪をひき、その度に学校を休んだ。学校を休む事は悲しかったけれど、本を沢山読めるという喜びもあった。それが又、熱を上昇させる原因にもなって、よく本を取り上げられたが、「何かを考える。事は出来た。そして、こう思った事を憶えている。「死にたくない、石にしがみついても生きたい。」「同じ死ぬなら後悔しない人生を送りたい。」

『ジャン・クリストフ』を読んでいるうちに、その時の「精神」の「魂」の求めていたものを見つけたような気がした。そして「魂の自由」の重大さは、私の心の中に深く住みつき、『魅せられたる魂』のアンネットに、私の姿の一面を見たような気がしたのである。これが、私とロマン・ロランとの出会いであった。これからは、彼の作品を研究するだけでなくロラン自身が求めていたものを、自分の道を見つけるのと、平行させて行きたいと思っている。



感 想

岡 田 淳 平

『ジャンクリストフ』『魅せられたる魂』を初めて読んだのが大学の低学年の頃であり、人生を真摯に力強く肯定する健康的な温かさに魅力を感じた。それは素直に必死になりやすかった20才前後の生活と、クリストフ、アンネット像との位相があいやすかったのだと思う。しかし学年を経るにつれ、クリストフ、アンネットのように種々の難事にぶっかり、倒れてもついには再び立ちあがってしまう人間よりも、平凡でさほど能力のない人間が、ふとしたことでつまらない事件にまきこまれ、失敗しそして目立たずつぶれてゆくような、そんな小説に興味共感をもつよう

になった。それとともにロランは私の中からだんだん薄らいでいった。それから10年近く経て、飯屋でたまたま見た新聞でロランの会合のあることを知り、再びロランを読むキッカケを持った。ちょうどその頃は、人に憧れることもなく自己開発の気力も沈滞し、生と死の重さを観念的に天秤にかけたりして、生きることの積極的姿勢に欠け、20才前後のころと違って何故こうも覇気がないのか、と焦っていたときだった。それでロランに目をつけ、クリストフやアンネットの生きることを力強く肯定する起源は何なのだろうか、彼らの底にある雄々しい生命力は自らが獲得したものなのか天賦のものなのか？という疑問で『ジャン・クリストフ』『魅せられたる魂』を再読することにした。読後の主観的感想として私の満足は得られなかった。クリストフ、アンネットは種々の試練にぶつかり、それを避けずに戦い、そして益々豊かに成長していった。彼らの自己奮闘は認める。しかし、大きなバラの花として咲くべき種子が次々と大きなバラの花として開花していったにすぎないのではないか、と思われた。彼ら（クリストフ、アンネット）の、生をおおらかに肯定し挑戦しようとする「基礎力」は、初期的に授けられたものとして、ロランはクリストフ、アンネットを創っているように思う。それは『魅せられたる魂』の新版への序にて、で「……しかしすべてが過ぎ去り、すべてが魔術であるとしても——本質的な力、幻想と夢の力、不断に創造し更新する生命の躍進力——「偉大な魔術師」はのこるのである。それは彼女のなかにある。それは彼女の生命の源である。アンネットはジャン・クリストフと同様に、創造的な魂の大種族にぞくしているが、……」からもうかがわれる。クリストフ、アンネットの生を賛歌する強い資質のどれほどの部分まで後天的に獲得されたのか？という問いに対しては、「基礎力」は始めから注入されていたのだと私は不満を感じる。

ところで人間は過去の自分の素地を踏切り、どれほど変り成長し得るのか。ロランは、「自分の素地まで変革はできないし、する必要もないのですよ。正しくあなた自身であればよいのですよ」と言いそうな気がする。… ロジェはアンネットに恋愛するが、アンネットから「あなたは私を愛している、愛していると唱えるけど、一体私をどのように愛しているのです」と問われた時に、「私の半身として」と答え、「この人は何も悟っていない」とアンネットを悲しませる。しかし、私は、

ロジェは精一杯だったし、記されているロジェの家庭環境、気質からすればもっともな振舞いであり、アンネットをがっかりさせようが立派に自分自身であった、と思う。持ち前の彼の素地とアンネットへの態度は自己矛盾はしておらず、自然な自分自身であった。又、善良な弱い人間としてのジュリアンにしても、素直に自分自身だったと思う。本の中ではロジェもジュリアンもアンネットから否定されたのだ。すると、「あなた自身でありなさい」という意味が私にはわからなくなってくる。私には大花の種が大花に開花しただけのように映るのだ。クリストフ、アンネットに徹底的親近感をもてるには彼らが出発ゼロの弱い人間として描かれることが私には必要だ。

独断的偏狭な読み取り方でロランの作品を薄読曲解しているかもしれない、と思いつつ……。

'77.4.16

ロマン・ロラン研究所から

去る2月16日、末川博先生が逝去されました。先生は本研究所創立以来、理事としてご尽力くださいましたが、高潔な人格と卓れた識見をそなえられた先生が、本研究所にとってどれほど大きい存在であったかは、更めて申し述べるまでもありません。ここに謹んでご冥福をお祈りする次第です。

さて、1976年度の本研究所の活動は、前年度に引続き、ロマン・ロラン・セミナーと公開講演会を中心におこなわれ、友の会々員をはじめ多くの方々のご協力により、一応所期の成果をあげることができたと言えましょう。現在のような社会的・経済的環境のなかでは研究所を維持すること自体、必ずしも容易ではなく、さし当り多くを望むことはできませんが、今日の状況における本研究所の存在意義に深く想いを到し、これからも地道な努力を積み重ねていきたいと存じます。

ロマン・ロラン・セミナーについては、「友の会だより」(43ページ)をご覧ください

いただくとして、公開講演会のほうは関西日仏学館の後援のもとに、同館稲畑ホールにおいて開催され、きわめて充実した、感銘深い集いとなりました。講演内容（またはその要旨）は本誌に逐次掲載すべく、すでに講師の先生方のご快諾を得ています。

第8回 1976年7月11日 午後6時開会

- ロマン・ロランとゲーテ …………… 大阪市立大学教授 南大路振一氏
ユダヤ民族と西洋文明 …………… 京都精華短期大学教授 岡本 清一氏

第9回 1977年2月10日 午後6時半開会

- 中国文学とロマン・ロラン …………… 大阪外国語大学教授 相浦 泉氏

ところで、ロマン・ロラン関係の文献・資料の蒐集・整備もまた本研究所の活動の重要な柱のひとつですが、当年度には若干の和書・洋書を購入したほか、海外から下記の図書を受贈しました。なお、1975年8月までに受入れ、整理を完了したロマン・ロラン関係の図書のうち、洋書約800点の目録ができあがっています。ご希望の方には実費でお領ちしますので、研究所宛てご照会ください。

(海外からの受贈図書)

- | | | | |
|---------------------|---|------------------------------------|----|
| Juan Cristobal | 1 | (Colombia) | |
| Juan Cristobal | 2 | " | |
| Juan Cristobal | 3 | " | |
| Bernard Melet | : | "L'Eros d'une héroïne" | |
| | | (Trois études sur l'Ame Enchantée) | |
| | | (La Pensée Universelle) | |
| Bernard Duchatelet | : | "Les Débus de Jean. Christophe" | I |
| | | (1886 - 1906) | |
| Bernard Duchatelet | : | "Etudes de Genève" | II |
| Tamara Motylova | : | "Romain Rolland" | |
| Helena Mandic-Pachl | : | "Romain Rolland en Yougoslavie" | |

(文責 波多野)

友の会だより

ロマン・ロラン研究所のセミナーを兼ねた友の会例会は、現在までに通算226回をかぞえています。その活動状況は下記のとおりです。

1976年3月

宮本先生御夫妻、ロマン・ロランに関する国際シンポジウムに御出席のため、例会は休みました。

4月22日(土)

218回例会

第43回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：「魅せられたる魂」母と子 第2部

発表者 内山 俊孝

出席者 19名

5月22日(土)

219回例会

第44回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：「魅せられたる魂」母と子 第3部

発表者 高島 敏郎

出席者 24名

親と子の断絶をテーマとして、熱心な発表があり、活発な意見が交わされた。

6月26日(土)

220回例会

第45回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：「ロマン・ロラン国際シンポジウムに参加して」

講師 宮本 正清

出席者 25名

パリにおけるシンポジウムでの宮本先生の講演の録音テープを聞いたり、当日のアルバムを見たりして有意義なセミナーであった。

7月24日(土)

221回例会

第46回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：「魅せられたる魂」母と子 第4部

発表者 杉本 千代子

出席者 20名

母と子の問題について、母親の立場からの真剣な模索がうかがわれる好発表であった。

9月25日(土)

222回例会

第47回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：「魅せられたる魂」母と子 第5部及びエピソード

発表者 杉本 千代子

出席者 19名

前回に引きつゞき杉本さんの熱心な発表に感銘を受けた。

10月23日(土)

223回例会

第48回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：「魅せられたる魂」予告する者 I ひとつの世界の死 第1部
テーベ市に対する7人

発表者 大橋 哲夫

出席者 15名

少人数ながら充実したよい討論がもたれた。

11月27日(土)

224回例会

第49回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：「魅せられたる魂」予告する者 Iひとつの世界の死 第2部
草原のアンネット

発表者 辻村 由美子

出席者 16名

1977年1月29日(土)

225回例会

第50回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：「ロマン・ロラン生誕記念日にちなんで」

講師 宮本 正清

「セザール・フランクの『至福』について」

大橋 哲夫

出席者 25名

ロランの誕生日と例会の土曜日がぴったり会って、寒い夜にもかかわらず多数の参加者があり熱気溢れる会合となった。大橋氏御持参のレコードでセザール・フランクの『至福』を鑑賞し、ロラン生誕を祝うにふさわしい雰囲気の一夜であった。

2月26日(土)

226回例会

第51回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：「魅せられたる魂」予告する者 Iひとつの世界の死 第3部
罪の風

発表者 椿 充代

出席者 14名

ロランの評論・日記等を多数読破してのきめ細かい発表で、時間の

ないのが惜しまれた。

3月26日(土)

227回例会

第52回 ロマン・ロランセミナー

テーマ：「魅せられたる魂」予告する者 出産1 第1部 たたかい

発表者 佐藤 克子

出席者 13名

日本の歴史と重なり合わせてアンネットとマルクの歩みを考察され、興味深い発表であった。出席者の盛んな意見交換があり、印象のこる例会となった。

あ と が き

おくれればながら漸く「ユニテ」第5号をおとどげできることになりました。今までお手伝いをしたことはあっても、全体的な編集ということについては全くのしろうとである織田さんと私が、今回は2人で悪戦苦闘することになり、種々見苦しい箇所や手落ちがあることと思いますが、ご寛容下さい。

宮本正清先生からは、数編の原稿をいただき、編集部で巻頭言を選ばせていただきました。ロランの真摯さがよく表われていて、読む人を動かさずにはおかない言葉が溢れています。

南大路振一先生からは、去年8月の公開講演会での講演内容を新たに書き下していただきました。ご多忙のなかを「ユニテ」のために貴重な「ロランとゲーテ」をお寄せ下さいましたこと厚く御礼申し上げます。

尚、これに関連して、ロランが著作の中でゲーテについて触れている箇所を拾って索引を作ってみては、という織田さんの発案で、ご覧のような一覧表ができました。ロラン研究の一助にもなれば幸いです。索引づくりに御協力下さいました

渡辺道子さんほかの方たちにこの場所を借りて御礼申し上げます。

国際シンポジウム (Colloque international Romain Rolland à Nevers) の報告は、既に1年を経過しており、記憶も遠ざかれておりますのに、宮本先生に御無理をおねがいして、快くまとめていただきました。世界各国からの熱心なロラン研究者の発表の演題と、シンポジウムの状況がよく判って、得難いレポートとなりました。

“R. R. のためのおぼえがき” No. 1 をお寄せ下さいました椿充代さんは、関西学院大学で日本史を専攻されましたが、熱心なセミナーの一員です。ロランへのとり組み方の並々でない、力強い労作です。続いての御寄稿をおねがいたします。

先号からもうけました「ユニテの広場」に、今回は静岡大学の山口三夫先生、奈良の名倉美津子さん、京大理学部物理研修員の岡田淳平さんからご投稿いただきました。このさきやかな機関誌「ユニテ」を育てるために、会員のみなさんが奮ってご投稿下さいますようお願いいたしております。

(編集部 相浦)

投 稿 歓 迎

- ロマン・ロラン友の会の会員であれば、誰でも自由に投稿できます。現在のところ、枚数の制限はいたしておりませんので、何枚書いて下さっても結構です。ただし、掲載の都合上、何回かにわけたり、適当に削減することがありますので、ご承知下さい。
- また、当然のことですが、原稿は必ず、四百字詰、または二百字詰の原稿用紙に横書きで書いて、ロマン・ロラン研究所あて、お送り下さい。
- 締め切り日は特にもうけておりません。年二回の発行を原則としておりますので、適当な時にお送り下されば、適当に掲載いたします。
- 原稿掲載者には、当該「ユニテ」を3部贈呈いたします。

「ユニテ」 編集部

ロマン・ロランセミナー

日時 毎月第4土曜日 午後7時～9時
場所 ロマン・ロラン研究所
会費 200円
講師 宮本正清先生・波多野茂弥先生

(参加自由)

主催 ロマン・ロラン研究所

ユニテ 第3期 第5号

発行日 1977年3月31日
発行所 財団法人 ロマン・ロラン研究所
京都市左京区銀閣寺前町32
TEL(075) 771-3281
印刷所 昭和堂印刷所
京都市左京区百万辺交差点電停前